

一代聖教大意

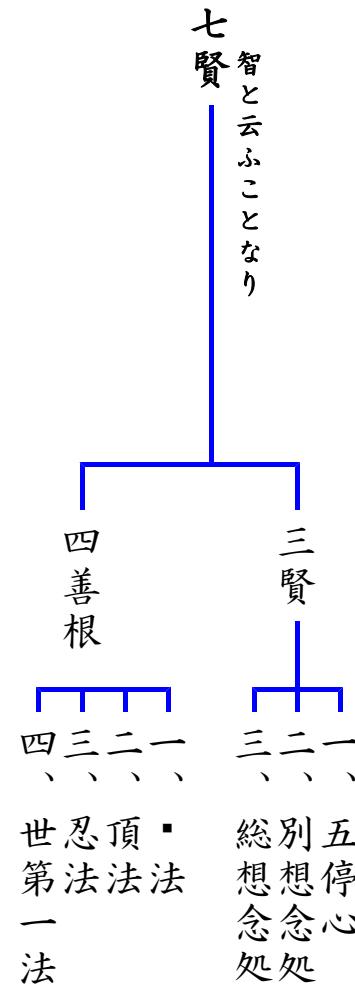
(一代大意抄)

三七歲

正嘉二年二月一四日

四教。一には三蔵教、二には通教、三には別教、四には円教なり。始めには三蔵教とは、阿含経の意なり。此の教の意は六道の外を明かさず。但し正報は十界を明かすなり。地・餓・畜・修・人・天の内の因果の道理を明かす。但し正報は六道が六にて有れば六界と申すなり。此の教の意は六道より外を明かさざれ世ばばすと云ふ。三界より外に淨土と申す生処ありと云はず。又三世に仏は次第に出来ばすと云ふ。亦定蔵とも云ふ。横に十方に並べて仏有りとも云はず。三蔵とは一には經律論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云ふ事あるなり。戒蔵と定蔵とも名づく五戒ふ。二には律蔵。亦戒蔵とも云ふ。三には論蔵。亦慧蔵と定蔵とは味禪定とも名づく八戒。二百五十戒・五百戒なり。定蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり。

戒定慧の勝劣と云ふは、但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり。但上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つて上の戒を具するなり。此の定の内に味禅・淨禪は三界の内の色無色界に生ず。無漏禪は声聞・縁覚と成りて見思を断じ尽くし灰身滅智するなり。慧は又苦・空・無常・無我と我が色身を觀ずれば、上の戒定を自然に具足して声聞・縁覚とも成るなり。故に戒より定勝れ、定より慧勝れたり。然れども此の三蔵教の意は戒が本体にあるなり。されば阿含経を総括する遺教経には戒を説けるなり。此の教の意は依報には六界、正報には十界を明かせども、依報に随つて六界を明かす経と名づくるなり。又正報には十界を明かせども縁覚・菩薩も声聞の覺りを過ぎざれば但声聞教と申す。されば仏も菩薩も縁覚も灰身滅智する教なり。声聞について七賢七聖の位あり。六道は凡夫なり。



此の七賢の位は六道の凡夫より賢く、生死を厭ひ、煩惱を具しながら煩惱を發こさざる賢人なり。例せば外典の許由・巢父が如し。

| | |
|--------|----------------|
| 五停心 | 息を数へて散乱を治す。 |
| 三、二、一、 | 身の不淨を觀じて貪欲を治す。 |
| 慈 不 数 | 慈悲を觀じて嫉妒を治す。 |
| 悲 净 息 | |

四、因縁

十二因縁を観じて愚痴を治す。

五、界方便

地水火風空識の六界を観じて障道を治す。

亦は念仏

と云ふ

別想念處

一、身

二、心

三、法

四、法

外道は常心樂受我法淨身、仏は苦・不淨・無常・無我と説く。
先の苦・不淨・無常・無我を調練して觀ずるなり。

頂法
智慧の火、煩惱の薪を蒸せば煙の立つなり。故に・法と云ふ。

山の頂に登りて、四方を見るに雲り無きが如し。世間出世間の因果の道理を委しく知つて闇り無き事に譬へたるなり。始めて五停心より此の頂法に至るまでは、退位と申して惡縁へば惡道に墮す。而れども此の頂法の善根は失せずと習ふなり。

忍法
世第一法

此の位に入る人は永く惡道に墮ちず。

此の位に至るまでは賢人なり。
但し今に聖人と成るべきなり。

七聖
正と云ふ事なり
に三
二、修道に三

一、見道に二

隨信行 鈍根

一、隨法行 利根

一、信解 利根

三、見得 利根

三、身証 利根

利鈍に亘る

三、無学道に二

慧解脱

俱解脱

利根

利根

阿羅漢

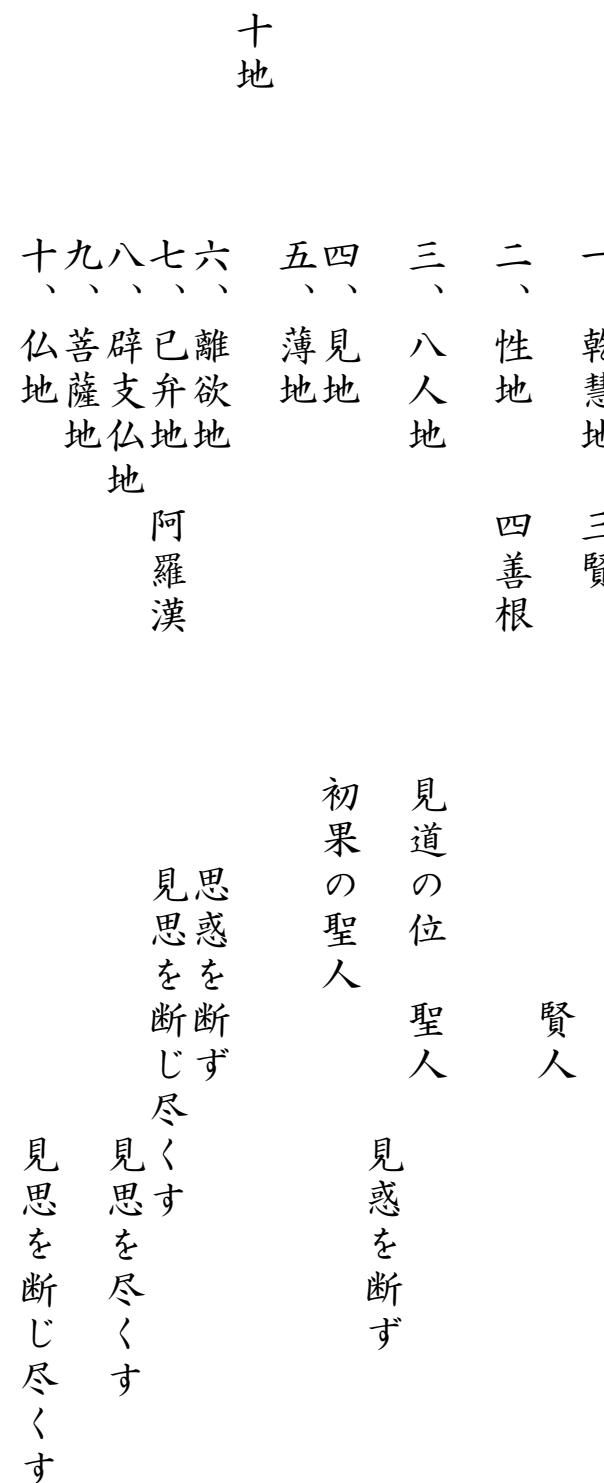
慧解脱

利根

利根

見思の煩惱を断ずる者を聖と云ふ。此の聖人に三道あり。見道とは見思の見惑を断じ尽くす。此の見惑を尽くす人をば初果の聖者と申す。此の人は欲界の人天には生ずるとも、永く地餓畜修の四惡趣には墮ちず。天台云はく「見惑を破するが故に四惡趣を離る」文。此の人は未だ思惑を断ぜず、貪身に有り。貪欲あるが故に妻を離る。而れども他人の妻を犯さず。愚癡なる故に妻を帯す。而れども虫自然に四寸を去る。愚癡なる故に妻を犯さず。信恚

に我が身初果の聖者とは知らず。婆娑論に云はく「初果の聖者は妻を八十一度一夜に犯す」取意。天台の解釈に云はく「初果、地を耕すに虫四寸を離るゝは道共の力なりと。第四果の聖者阿羅漢を無学と云ひ、亦は不生と云ふ。永く見思を断尽して三界六道に此の生の尽きて後は生ずべからず。見思の煩惱無きが故なり」と。又此の教の意は三界六道より外に處を明かさざれば外の生處有りと知らず。身に煩惱有りとも知らず、又生因無く但灰身滅智と申して身も心もうせ虚空の如く成るべしと習ふ。法華経にあづば永く仏になるべからずと云ふは二乗是なり。此の経の修行の時節は、声聞は三生 鈍根六十劫 利根。又一類の最上利根の声聞は一生の内に阿羅漢の位に登る事 緣覺は四生 鈍根 百劫 利根。菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず。而も四弘誓願を發こし、六度万行を修し、三僧祇百大劫を経て三歳教の仏と成る。仏と成る時始めて見思を断尽するなり。見惑とは一には身見 亦我見とも云ふ、二には辺見 亦断見常見ともいふ、三には邪見 亦撥無見と計因非道計道見とも云ふ、五には戒禁取見 亦非因なり。見惑に八十有れども此の五が本にて有るなり。此の法門は阿含經四十卷・婆沙論二百卷・正理論・顕宗論・俱舍論具に明かせり。別して俱舍宗と申す宗有り。又諸の大乘に此の法門少々明きらめたる事有り。謂はく方等部の經・涅槃經等なり。但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。次に通教大乗の始めなり。但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。又戒定慧の三學あり。此の教のおきて大旨は六道を出でず。菩薩共に少一分利根なる菩薩、六道より外を推し出だすことあり。声聞は灰身滅智の意ひへる者もあり、へらざる者もあり。此の教に十也あり。



此の通教の法門は別して一経に限らず。方等經・般若經・心經・觀經・阿彌陀經・双觀經・金剛般若經等の經に散在せり。此の通教の修行の時節は、動喻塵劫を経て仏に成ると習ふなり。又一類疾く成ると云ふ辺もあり。已上、上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性ありとも談せず。始めて修すれば声聞・緣覺・菩薩・仏とおもひおもひに成ると談ずる教なり。

爾前の円に五十二位又戒定慧あり。爾前の円とは華嚴經の法界唯心の法門なり。文に云はく「初發心の時便ち正覺を成す」と。又云はく「圓滿修多羅」文。淨名經に云はく「無我無造にして受くる者は無けれども、善惡の業敗亡せず」文。般若經に云はく「初發心より即ち道場に坐す」文。觀經に云はく「韋提希時に応じて即ち無生法忍を得」文。梵網經に云はく「衆生仏戒を受ければ位大覺に同じ。即ち諸仏の位に入り、真に是諸仏の子なり」文。此は皆爾前の円の証文なり。此の教の意は又五十二位を明かす。名は別教の五十二位の如し、但し義はかはれり。其の故は五十二位が互ひに具して淺深も無

五十二位

梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華嚴の十戒・涅槃經の自行の五支戒・護他の中戒・大論の十戒。是らは皆菩薩の三聚淨戒の内攝律儀戒なり。攝善法戒とは八万四千の法門を攝す。饒益有情戒とは四弘誓願なり。定とは觀・練・薰・修の四種の禪定なり。慧とは心生十界の法門なり。五十二位を立つ。

五十二位とは一には十信、二には十住、三には十行、四には十回向、五には十地、六には等覺、七には妙覺、八には一位、九には已上五十二位。十信は退位凡夫菩薩未だ見思を断ぜず

此等は皆法華以前の諸經に依つて立てる宗なり。爾前の円を極として立てたる宗どもなり。宗々の人々の諍ひは有れども經々に依つて勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたるべきなり。人師の釈を以て勝劣を論ずること無し。

次に五時。五時は一に華嚴經、結經は梵網經、別円二教を説く。二には阿含、結
等の説は遺教經、但三蔵教の小乗の法門を説く。三には方等經・宝積經・觀經。
四には般若經、知らざる大乗經なり。結經は瓔珞經、蔵通別圓の四教を皆説く。
五には結經は仁王經、通教・別教・圓教の後三教を説き三蔵教を

し勝劣も無し。凡夫も位を経ずとも仏にも成る、又往生するなり。煩惱も断ぜざれども仏に成るに障り無く一善一戒を以ても仏に成る。少々開会の法門を説く處もあり。所謂淨名經には凡夫を会す。煩惱惡法も皆会す。但し二乗を会せず。般若經の中には二乗の所学の法門をば開会して二乗の人と悪人を爾前の圓教の意なり。法華經の圓教は後に至つて書くべし。已上四教。

爾前の諸經は一經。一經を習ふに又余經を沙汰せざれども苦しからず。故に天台の御釈に云はく、「若し余經を弘むるには教相を明らかめざれども義に於て傷むこと無し。若し法華を弘むるには教相を明らめずんば文義欠くること有り」文。法華經に云はく、「種々の道を示すと雖も其れ實には仏乗の為なり」文。種々の道と申すは爾前的一切の諸經なり。仏乗の為とは法華經の為に一切の經を説くと申す文なり。

今の大法とは此等の十界を互ひに具すと説く時、妙法と申す。十界互具と申す事は十界の内に一界に余の九界を具し十界互具すれば百法界なり。玄義二に云はく「又一法界に九法界を具すれば即ち百法界有り」文。法華経とは別の事無し。十界の因果は爾前の経に明かす、今経は十界の因果互具をおきてたる計りなり。爾前の経意は菩薩をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじなど説けば、菩薩は悦び声聞はなげき人天等はおもひもかけずなどある経

永く舟航に用う。隨喜・見聞恒に主伴と為る。若しは取・若しは捨、耳に経て縁と成り、或は順・或は違、終に斯に因つて脱す」文。私に云はく、若しには取若しは捨或順或は違の文、肝に銘ずるなり。法華翻経の後記 釈僧肇記

姚興王に對して曰く、予昔天竺国に在りし時、遍く五竺に遊んで大乗を尋討し、大師須利耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の經を屬累して言はく、仏曰、西に隠れ遺光東北を照す。茲の典、東北諸國に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」文。私に云はく、天竺よりは此の日本は東北の州なり。慧心の一乗要決に云はく「日本一州円機純熟にして、朝野遠近同じく一乗に歸し、縉素貴賤悉く成仏を期す。唯一師等あて若し信受せずば權とや為さん実とや為さん。權と為きば貴むべし。淨名に云く、衆の魔事を覺智して而も其の行に隨はざるは善力方便を以て意に隨つて而も度すと。實と為きば憐れむべし。此の經に云はく、當來世の惡人は仏説の一乗を聞きて迷惑して信受せせず、法を破して惡道に墮つ」文。

も有り。或は二乗は見思を断じて六道を出でんと念ひ、菩薩はわざと煩惱を
断ぜずして六道に生まれて衆生を利益せんと念ふ。或は菩薩の頓悟成仏を見、
或は菩薩の多俱低劫の修行を見、或は凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞の為
には有らずと見て、人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏、凡夫の
往生は我が往生、聖人の見思断は我等凡夫の見思断とも知らずして四十二年
は過ぎしなり。爾るに今の經にして十界互具を談ずる時、声聞の自調自度の
身に菩薩界を具すれば、六度万行も修せず、多俱低劫も経ぬ声聞が、諸の菩
薩のからくして修したりし無量無辺の難行道が声聞に具する間、をもはざる
外に声聞が菩薩と云はる。人をせむる獄卒、慳貪なる凡夫も亦菩薩と云はる。
仏も亦因位に居して菩薩界に摄せられ、妙覺ながら等覚なり。藥草喻品に声
聞を説いて云はく「汝等が所行は是菩薩の道なり」と。又我等六度を行せ
ざるが六度満足の菩薩なる文、經に云はく「未だ六波羅蜜を修行することを得
ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」と。我等一戒をも受けざるが持戒の者と
云はる文、經に云はく「是則ち勇猛なり是則ち精進なり、是を戒を持ち頭陀
を行づる者と名づく」文。

問うて曰く、妙法を一念三千と云ふ事如何。答ふ、天台大師此の法門を覺り給ひて後、玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念處・次第禪門等の多くの法門を説き給ひしがども、此の一念三千をば談義し給はず。但十界百界千如の法門ばかりにておはしまし、なり。御年五十七の夏四月の比、荊州の玉泉寺と申す處にて御弟子章安大師と申す人に説ききかせ給ひし止觀十卷あり。上の帖に猶をしみ給ひて但六即・四種三昧等計りの法門にてありしに、五の卷より十境十乘を立て、一念三千の法門を書し給へり。此を妙樂大師末代の人勸進して言はく「並びに三千を以て指南と為す○請ふらしくは尋ね読まん者心に異縁無かれ」文。六十卷三千丁の多くの法門も由無し、但此の初めの二・三行を意得べきなり。止觀の五に云はく「夫一心に法界を具す、一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す。此の三千一念の心に在り」文。妙本理に称ひて、云はく「當に知るべし身土。一念の三千なり。故に成道の時此の樂承け釈して、一身一念法界に遍し」文。

日本の伝教大師比叡山を建立の時、根本中堂の地を引き給ひし時、地中より舌八つある鑰を引き出だしたりき。此の鑰を持つて入唐の時に、天台大師より第七代妙楽大師の御弟子道邃和尚に值ひ奉りて天台の法門を伝へし時、天機秀發の人たりし間、道邃和尚悦びて天台の造り給へる十五の経蔵を開き見せしめ給ひしに、十四を開きて一の蔵を開かず。其の時伝教大師云はく、師、此の一蔵を開き給へと請ひ給ひしに、邃和尚の云はく、此の一蔵は開くべき鑰無し。天台大師自ら出世して開き給ふべし云々。其の時伝教大師日本

此の經には二妙あり。釈に云はく「此の經は唯二妙を論ず」と。一には相待妙・二には絶待妙なり。相待妙の意は、前四時の一代聖教に法華經を対して爾前と之を嫌ひ、爾前をば當分と云ひ法華を跨節と申す。絶待妙の意は、一代聖教は即ち法華經なりと開会す。又法華經に二事あり。一には所開、二には能開なり。開示悟入の文、或は皆已成仏道等の文、一部八卷二十八品六万九千三百八十四字、一々の字の下に皆妙の文字あるべし。此能開の妙なり。此の法華經は知らずして習ひ談ずる物は但爾前經の利益なり。阿含經の開會の文は云はく、「我が此の九部の法は衆生に隨順して説く、大乗に入るに為れ。」華嚴經開會の文は「一切世間の天人及び阿修羅は皆謂へり今釈迦牟尼佛」等文。般若經開會の文は安樂行品の十八空の文なり。觀經等の往生安樂開會の文は「此に於て命終して即ち安樂世界に往く」等文。散善開會の文は「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を皆是我が有なり。其の中の衆生は悉く是吾が子なり」と。外典開會の文は「今此の三界は皆南無仏と称せし皆已に仏道を成じき」文。一切衆生開會の文は「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を

今。の法華經は自力も定めて自力にあらず、十界の一切衆生を具する自なる故に。我が身に本より自の仏界、一切衆生の他の仏界我が身に具せり。されば今仏に成るに新仏にあらず。又他力も定めて他力に非ず、他仏も我等の自ら具せる故に、又他仏が我等が如き自己に現同するなり。共と無因とは略す。法華經已前の諸經は十界互具を明かさざれば、仏に成らんと願ふには必ず九界を厭ふ、九界を仏界に具せざる故なり。されば必ず悪を滅し煩惱を断じて仏には成ると談ず、凡夫の身を仏に具すと云はざるが故に。されば人天、悪人の身をば失ひて仏に成ると申す。此をば妙樂大師は厭離断九の仏と名づく。されば爾前の経の人々は仏の九界の形を現ずるをば、但仏の不思議の神変と思ひ、仏の身に九界が本よりありて現ずるとは云はず。されば実を以て現ぐ。されば爾前の経の仏のみ有りて、実の凡夫が仏に成りたる事は無きなり。煩惱を断じて九界を厭ひて仏に成らんと願ふは、實には九界を離れたる仏は無き故に。往生したる実の凡夫も無し、人界を離れたる菩薩界も無き故に。但法華經の仏の、爾前にして十界の形を現じて、所化とも能化とも、悪人とも善人とも外道とも云はれしなり。実の悪人・善人・外道・凡夫は方便の權を行じて真実の教とうち思ひなしすぎる程に、法華經に來たりて方便にてありけり、實には見思無明も断ぜざりけりなど覺知するなり。一念三千は別に委しく書くべし。

四 無因性 無因力 自然外道

四性計

| | |
|-------|-------|
| 四三 | 二一 |
| 共性 | 他性 |
| 無因性 | 自性 |
| 無因力 | 他力 |
| 自然外道 | 自力 |
| 勒婆婆外道 | 迦毘羅外道 |
| 自然外道 | 樓僧伽外道 |

より隨身の鑰を以て開き給ひしに、此の經蔵開きたりしかば經蔵の内より光
室に満ちたりき。其の光の本を尋ぬれば此の一念三千の文より光を放ちたり
しなり。ありがたかりし事なり。其の時邃和尚は返りて伝経大師を礼拝し給
ひき、天台の後身と云云。依つて天台の經蔵の所叢は遺り無く日本に亘りし
なり。天台大師の御自筆の觀音經、章安大師の自筆の止觀、今比叡山の根本
中堂に収めたり。

説かんも皆正法に順ぜん」文。兜率開会の文、人天所開会の文しげきゆへにいださず。此の經を意得ざる人は經の文に此の經を読みて人天に生ずと説く文を見、或いは兜率・利などにいたる文を見、或は安養に生ずる文を見て、穢土に於て法華を行ぜば、經はいみじけれども行者不退の地に至らざれば、穢土にして流転し、久しう五十六億七千万歳の晨を期し、或は人畜等に生じて隔生する間、自らの苦しみ限り無しなんど云云。或は自力の修行なり難行道なり等云云。此は恐らくは爾前法華の二途を知らずして自身癡闇に迷ふのみに非ず一切衆生の仏眼を閉づる人なり。兜率を勧めたる事は小乗経に多し。少しは大乗経にも勧めたり。西方を勧めたる事は大乗経に多し。此等は皆所開の文なり。

法華經の意は兜率に即して十方仏土中西方に即して十方仏土中人天に即して十方仏土中云々。法華經は悪人に對しては十界の惡を説けば悪人五眼を具しなんどすれば惡人のきわまりを救ひ、女人に即して十界を談ずれば十界皆女人なる事を談ず。何にも法華圓実の菩提心を發こさん人は迷ひの九界へ業力に引かる事無きなり。此の意を在じ給ひけるやらん。法然上人も一大向念佛の行者ながら選択と申す文には雜行・難行道には法華・大日經等をば除かれたる所も有り、委しく見よ。又慧心の往生要集にも法華經を除きたり。給ふとも、日蓮は全くもちゆべからず。一代聖教のおきてに違ひ、三世十方の仏陀の誠言に違する故に。いわうやそのぎ無し。而るに後の人々の消息に、法華經を難行道、經はいみじけれども末代の機に叶はず、謗ぜばこそ罪にても有らめ、淨土に至りて法華經をば覺るべしと云云。日蓮の心はいかにも此の事はひが事にや有るらん。能く能く智人習ふべしが事と覺ゆるなり。かう申すもひが事にや有るらん。

正嘉二年二月十四日

日蓮撰